

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531163

研究課題名(和文) 明治後期から昭和戦前期の師範学校における赤津隆助の図画指導の役割に関する研究

研究課題名(英文) Research on Role of Teaching Art by Ryusuke Akatsu at Normal School between the Late Meiji Era and before the Wartime in the Showa Era

研究代表者

増田 金吾 (MASUDA, Kingo)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：20134786

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦前の師範学校において美術教育家を中心に有為な人物を数多く育てた図画教育家・赤津隆助研究により、今日の教員養成において見直すべき点を追究しようとしたものである。

研究は、文献収集を基に進めた。まず、赤津における教育思想形成に着目し、教育者・赤津が形成されていく過程を明らかにした。次に、彼が東京府青山師範学校を中心にして、生徒をどのように育てたのかを調べた。その結果、「赤津は、幅広い人格育成のために、『師の姿勢から感じ取らせるという方法』をとった」ことが明らかになった。このように教育的影響力を明確化したことは、今日の教員養成に対し示唆を与えたと言え、本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)： This research attempted to reconsider issues in today's teacher training by focusing on the art educator, Ryusuke Akatsu, who nurtured promising educators at a normal school before the wartime in the Showa era.

A collection of writings about Ryusuke Akatsu provided the basis of the research. By focusing on the development of Akatsu's educational thought, this research revealed how Akatsu, as an educator, formed his thought. The research then explored how he educated his pupils at Tokyo Aoyama Normal School. As a result, the research showed that Akatsu used "methods of letting pupils themselves perceive his philosophy from his attitude toward life," which allowed them to grow as individuals. The research clarified how powerful his educational influence was and the implications for today's standard of teacher training.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教育学 教員養成 師範学校 美術教育史 図画教育 赤津隆助

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

本テーマ「明治後期から昭和戦前期の師範学校における赤津隆助の図画指導の役割に関する研究」に関連する国内の研究動向として、師範学校に係わるものは、岩田康之著「1940年代日本の教職『教育学』における『教師の権威』の変容 教師養成教育における『教職』の位置づけをめぐって」平成元 - 平成3年度科学研究費補助金一般研究(B)研究報告書、1992年、などがある。

また、赤津隆助の図画指導に係わるものとしては、増田金吾著「赤津隆助の図画教育」『日本美術教育論集』No.37、2004年、増田著「赤津隆助の図画指導法と新図画教育会」『大学美術教育学会誌』40号、2008年、などがある。

一方、国外のものにこうした研究テーマに関連するものは見当たらない。

(2) 応募者のこれまでの研究成果を踏まえて着想に至った経緯

応募者は、「美術教育史年表 その1」『東京学芸大学紀要第5部門芸術・体育』第31集、1979年、発表以来美術教育の歴史、並びに児童画に関する研究を続けてきた。この間、わが国の図画指導法の変遷、美術教育の主義主張(思想)史、など手がけてきた。

その成果は、「芸術学会『会報』及び同会機関誌『スクールアート』に見られる昭和20年代美術教育におけるアメリカの影響」『東京学芸大学紀要第5部門芸術・体育』第36集、1984年、「自由画運動の時代」『美育文化』第37巻11号、1987年、『総合教科「芸術」の教科課程と教授法の研究』(分担執筆)、多賀出版、1996年、など多くを論文や著書として著されている。

また、応募者はわが国における発表は勿論のこと、米国ペンシルベニア州立大学における

『美術教育史 第2回ペンシルベニア州立大学協議会(1989)紀要』1992、(全米美術教育協会刊)に「日本の美術教科書における指導法の変遷」や、米国イリノイ大学の『美的教育誌』2003、(イリノイ大学出版)に「日本の美術教育における歴史的概観」など、国外においても論文(英文)を発表している。

こうした経緯があった後、先に触れた「赤津隆助の図画教育」(2004)、続いて「明治20年代の図画教育と図画教科書 赤津隆助と図画教科書との関係、特に瀧和亭筆『日本画鑑(かがみ)』の指導内容を中心として」中研紀要『教科書フォーラム』No.3、財団法人中央教育研究所、2005年。「明治後期の小学校における図画の指導法(その1) 明治41・42年の東京府(青山)師範学校附属小学校教授細目等の分析を通しての考察」美術科教育学会誌『美術教育学』第27号、2006年。「想画教育の発生と展開 長瀬小学校における佐藤文利の指導と赤津隆助との影響関係にふれつつ」美術科教育学会誌『美術教育学』第29号、2008年。「師範学校における図画教育(その1) 明治後期の東京府青山師範学校における赤津隆助の指導」『大学美術教育学会誌』41号、2009年、などを発表した。

「赤津隆助の図画教育」に研究の対象を絞ってきたのは、これまでの研究成果を踏まえてのことであるが、その理由は、赤津隆助が多く優れた美術教育家や教育家を世に送り出していたことに注目したからである。また、現代的教育課題に対処するとき、教員養成の指導内容・指導方法の検討が不可欠であり、赤津の指導にその糸口を見出せると考えたからである。つまり、今日の教員養成を考える時、ヒントとなることながら師範学校教育における赤津の教育思想に、またその方法論に潜んでいると捉えたからである。

2. 研究の目的

(1) 赤津隆助の教育思想形成に役立った

部分を明確化する

「赤津隆助の教育思想形成に役立った部分」を「明治時代中期の図画を中心とする学校教育の実態調査」や「赤津に影響を与えた美術教育思想(人物・文献等)の調査」を行うことによって、明確化する。

ただ、「明治時代中期の図画を中心とする学校教育の実態調査」を行っても、それを彼がどの程度吸収したかを確認するには限界があると思われる。しかし、「赤津に影響を与えた美術教育思想(人物・文献等)の調査」は、緻密に調査することにより、明確化がある程度可能となると考えた。

(2) 師範学校教育と赤津隆助の教育思想との関連性の追究を行う

赤津は東京府青山師範学校(青山師範学校附属小学校も含む)において、教育と研究を行っている。本研究では、その研究を深化すると共に、「明治時代中期から昭和戦前期の師範学校の学科課程調査」を行うことにより、当時の師範学校の教育内容を明らかにする。東京以外に、全国の師範学校5校程度を抽出して調査する。また、「赤津の教育評価方法」についても調べたい。

(3) 赤津隆助が与えた教育的影響を確認する

教育の成果を確認するには時間がかかる。また、この人物が育ったのは、「この教育(教師)の影響である」と限定することは、困難さを伴うという問題がある。

しかし、ここでは「彼の主な教え子4名を選んでの追跡調査」を行い、その人物評を基に検証するという方法をとることとした。

3. 研究の方法

(1) 赤津隆助に関わる教育思想の形成

「明治時代中期の図画を中心とする学校教育の実態調査」

教育全般については、文部省著作『学制百

年史(資料編)』ぎょうせい、1972年、仲新・持田栄一編『学校史要説』学校の歴史 第1巻、第一法規出版、1979年、仲新・伊藤敏行・江上芳郎編『小学校の歴史』学校の歴史 第2巻、第一法規出版、1979年、等を用いつつ、概要を把握する。

図画教育については、山形寛著『日本美術教育史』黎明書房、1967年、金子一夫著『近代日本美術教育の研究 明治時代』中央公論美術出版、1992年、等を用いて概要を把握する。

「赤津に影響を与えた美術教育思想(人物・文献等)の調査」

赤津隆助が高等小学校時代に用いた図画教科書、文部省編集局蔵版『小学習画帖』再版、1887年、瀧和亭筆『日本画鑑』発行吉川半七、1894年、などの教科書類、白浜徴編『文部省講習会 図画科講話集』大日本図書株式会社、1917年、などの文献を基に調査する。

以上、を基に、赤津隆助の出身地・福島県いわき市の図書館等で当該地の当時の教育を調査し、実態把握に努める。

(2) 師範学校教育と赤津隆助の教育思想との関連性

「明治時代中期から昭和戦前期の師範学校の学科課程調査」

教員養成の文献としては、東北大学教員養成制度研究会編『教員養成の研究』第一法規出版株式会社、1961年、篠田弘・手塚武彦編『教員養成の歴史』学校の歴史 第5巻、第一法規出版、1979年、三好信浩著『日本師範教育史の構造 地域実態史からの解析』東洋館出版社、1991年、水原克敏著『近代日本教員養成史研究 教育者精神主義の確立過程』風間書房、1990年、海原徹著『明治教員史の研究』ミネルヴァ書房、1973年、水原克敏著『近代日本カリキュラム政策史研究』風間書房、1997年、などがあり、それらを調査する。

また、全国の師範学校の調査対象校は、東京府青山師範学校、京都府師範学校、奈良県師範学校、福岡県師範学校、宮城県師範学校、北海道（札幌）師範学校などである。

「赤津の教育評価方法」の調査

赤津隆助は、新図画教育会など民間の図画教育研究団体でも活躍していた。こうしたところで発表した文章、その他著書・雑誌等多くの執筆が見られる。特に、1928（昭和3）年に創刊された美術教育雑誌『学校美術』に赤津は数多く執筆している。これらのものを中心に調査する。

(3) 赤津隆助が与えた教育的影響

「彼の主な教え子4名を選んでの追跡調査」

赤津隆助は、青山師範学校において多くの美術教育者やその他有為な人物を育てている。これは、本研究に着目した大きな理由の一つであるが、こうした人材に「教育の成果」を見ることができると考えた。

赤津の育てた教育家は、美術教育については、主な人物として武井勝雄、倉田三郎、稲村退三、手塚又四郎、阿部広司、箕田源二郎、熊本高工、稲垣達弥、等々である。美術教育家以外では、金沢嘉市、石戸谷哲夫などである。

これらの人物の中で、美術教育関係で特に目覚しい活躍をした人物である武井勝雄、倉田三郎、箕田源二郎、熊本高工については、追跡調査を行う。方法としては、文献調査と聞き取り調査に基づくものをまとめることによるものである。

これらの人物の内、武井を除き、三者には応募者・増田がかつて直接インタビューしたものがあつた。そのテープ起こしを行い、本研究テーマに合わせた整理・記録を行うことにする。これらは、以前、別の目的でインタビュー調査をしたものである。未発表の部分で、今回研究に活かせる部分を使用する。テープは、それぞれ全約2時間に及ぶものである。

以上、全体の整理、考察を行い、結論を導いていく。

4. 研究成果

ここでは、「2. 研究の目的」の「(1) 赤津隆助の教育思想形成に役立った部分を明確化する」、「(2) 師範学校教育と赤津隆助の教育思想との関連性の追究を行う」、「(3) 赤津隆助が与えた教育的影響を確認する」の内、「(2)」を「(1)」と「(3)」にそれぞれ入れ込んだ形で、次の二つにまとめた。

すなわち、「(1) 教育を受けてその人物がどのような思想形成をしたか」ということと、「(2) 他の人に教育を行いどのような影響を与えることができたか、またどのような教育方法を用いたか」を明確化した。

(1) 教育を受けてその人物がどのような思想形成をしたか

赤津隆助は、若い時に家が貧しく、勉強をできることがいかに幸せなことであるかを知っていたからこそ、人一倍頑張ることができた。また、背が低いということで入学試験の学科試験を受けられないなどの不条理を感じていたからこそ、多くの弱い人の立場になって考え、親切に対応することができた、と言えるだろう。それが結果的に、様々なタイプの人を育てるということにつながった。

以下、教育を受けることにより得ることのできたことがらを記す。

赤津隆助が小学生の頃、学校教育において図画は充実していなかったが、周囲の人達（友達、地域の人、父親等）に褒められたり、父親の協力的な姿勢があつたりして、制作するのに適した環境が得られ、制作する喜びを覚えることができた。また、高等小学校では、教師が目の前で自ら描く黒板画や教科書『日本画鑑（かがみ）』等から図画を学び、赤津にとって黒板画の指導法は後に真に生きたものとなった。

高等小学校補習科や準教員候補者養成所等では、図画と直接は関係ないが、漢文や国学等を、教育に熱心であった教師の神林晋や山本才八から学んだ。これは、図画を含め、将来幅広い学問をする上での基礎となった。

東京府青山師範学校生から同師範学校附属小学校訓導時代には、瀧澤菊太郎校長や大戸栄吉教諭から、人格形成や思想形成上重要な影響を受けた。特に、大戸の影響は大きかった。これにより、自分でしっかり学び、考える力がつき、それは更なる自己教育力に発展した。

青山師範学校卒業後は、図画教育上の影響を東京美術学校教授で図画教育家の白浜徹から受けた。白浜の世界的視野に立ち、学的基礎を踏まえた図画教育論を学び、それを実践に活用した。また、白浜の主張は、後の新図画教育会著作における赤津執筆部分の「図画教育の方法」によって、造形主義美術教育に生かされた。

日本画や絵画指導上の影響を日本画家の橋本雅邦から受けた。これにより、画手本を使わない指導法、生徒の個性を尊重する姿勢を学んだ。

教育家で新図画教育会会長の沢柳政太郎から、「学ぶことを止めず、教えることに飽きるな」という教育思想の根本となる教えを受けた。

また、赤津は、彼自身の自己教育力により、教育思想や図画教育思想をそれらのあるべき目標に近づけた。

しかし、何と言っても赤津には人の言葉に耳を傾ける謙虚な姿勢が常にあった。彼は生徒に対してさえ、相共に精進しようと考えていた。人は、たとえ素晴らしい言葉や出来事に出会っても、それを咀嚼して、受け入れなければ他から学ぶことはできない。赤津は、そうしたことができ、さらにそこに自分の考えを加え、実行をし、それを続けた人であった。

(2) 他の人に教育を行いどのような影響を与えることができたか、またどのような教育方法を用いたか

赤津隆助は、立場の弱い人の気持ちをよく理解しつつ、人の言葉に耳を傾ける謙虚な姿勢を持って、自分自身の向上を目指し努力する人であり、多くの人から尊敬される人物であった。

以下、教育を行うことにより与えることができたことと用いた教育方法を記す。

生徒の個性を尊重しつつ、生徒の個々の良さを引き出す教育を行った。その方法として、生徒とともに教師自身が描くところを見せ、言葉ではなく「行動」で示し、教えた。これは、生徒のためでもあるが、教師(赤津自身)のためでもあった。方法としては、教え込むのではなく、生徒に「感じとらせるという方法」であると言える。このようにして、子どもに接する姿勢、描く姿勢や描き方、などを具体的な方法で示した。

赤津は「教育は生活である。」と固く信じていた。寄宿舍や卒業生の絵画活動の集まりの会・青巒社で、教え子たちと生活を共にしたり、指導をしたり、学び合ったりした。これは「人間教育」とも言えるものである。

図画の授業では、基本的に教科書は使わない指導法(創造主義)を採った。一方で、図画の方法論を明確に示し、そこでは造形主義の美術教育の立場に立っていた。加えて、生活主義の美術教育とも言える想画教育においても、山形県長瀬小学校の想画教育を盛んにするなどの手助けをした。

生徒の個々の良さを認めつつ、美術教育の考え方として創造主義・造形主義・生活主義の美術教育すべてを受け入れる柔軟性や度量の広さを持って指導を行った。

赤津の育てた武井勝雄との関係について、武井は教育実習や新図画教育会を通じて、構

成教育（造形教育）の方法論の原点を赤津隆助から学んだ。また、川喜田煉七郎の講義を受けて構成教育を深め、展開して行った。

武井は、赤津から懐の深さを学び、構成教育だけでなく想画教育などへも理解を示し、図画教育を幅広く捉えていた。

赤津の育てた倉田三郎との関係について、倉田は、赤津隆助の指導により、初めて実物を前にした写生画の環境を与えられた。また、毎日描くことの重要性など、図画教師・教師のあるべき姿、取るべき態度を赤津から学び、それを師である赤津以上に進展させた。

画家としても大成した倉田は、自分の授業の中に、構成教育を早くから取り入れていた。こうした背景には、赤津や武井からの青巒社などにおける影響があったと思われる。

赤津隆助の指導について全体的に言えることは、人格的に優れた赤津は、教え子たちに対し幅広い人格の育成をした、と言える。加えて、多くの労苦を惜みず、結局は美術教育界、教育界、そして社会に貢献するという態度を、身をもって教えていた。これらのことも「感じとらせるという方法」によっていた。

武井勝雄や倉田三郎を含め教え子たちは、赤津に対して、「このことで指導を受けた」と言う部分が少ない。一方、赤津も自分の受持った生徒に対して、押しつけはせず、「[親鸞のように]私も私の生徒たちを私の弟子とは思いません」と言う。こうしたことを、そのまま言葉通りに受け止めると、赤津からは何も指導は受けていないということになるが、これは赤津の指導が正に「押しつけ」ではなかったことを意味している。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

増田金吾、「赤津隆助が与えた教育的影
東京府青山師範学校での教え子・武勝雄

や倉田三郎との関連を中心として」、『美術教育学』美術科教育学会誌、査読有、第35号、2014、pp.471-483

増田金吾、「赤津隆助の教育思想形成
赤津に影響を与えた教育・美術教育思想」、『大学美術教育学会誌』、査読有、45号、2013、pp.375-382

6．研究組織

(1)研究代表者

増田 金吾 (MASUDA, Kingo)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：20134786